
キラーハウス

ZOMBRA Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キラーハウス

【Nコード】

N6735Y

【作者名】

ZOMBRA Y

【あらすじ】

2006年、春。ある日を境に満月の夜になるとどこかの家族が惨殺される。全米を震撼させるこの事件に警察は手を焼く。一方、飛び級で大学を卒業したレベッカは、以前連続殺人事件で逮捕され異常犯人者専用医療施設に収容されているジョンに興味を持つ。だが、満月の夜に電話が掛かる。その内容は祖父の死を伝えるものだった。警察の進展しない調査に苛立ちを覚えたレベッカは友人と共に祖父の住んでいたテキサス州の屋敷に向かう。だが、そこで待ち構えて居たのは、異形な存在だった――

プロローグ

署に連絡が入ったのは、夜中のことだった。

市の死体保管所から殺人課宛の、緊迫した電話が入った。その内容には信じがたいものだ。

私はパトカーを猛スピードで飛ばし、保管所に直行した。

今夜の事件は異常極まりないものだった。

被害者——幼い少女の死体が回収された。刃物で喉を切られたそう。

私は中に飛び込んで検死室に駆け込んだ。

広い部屋のテーブルの上には、数々の解体道具が置かれている。

天井の光が照らしているもの。

解体の終わった子供の死体。

哀れなものだ。これから人生を切り開く少女が無残に殺され、無残に解体された。

遺族にはどういえるのか……

死体の脇に居た3人の学者が私を迎えた。青い手術着を着て、マスクをしている。

「遺族にはどう説明する？」

私は尋ねた。

3人が顔を見合わせ、1人の若い人物が答えた。

「実は、少女の家族は行方不明なんです」

私は耳を疑った。

「行方不明？」

「はい、少女の遺族は全員行方不明です。家も荒らされた形跡なしで」

何てことだ……正気の沙汰ではない。

「それと、少女の胃からテーブルコーダーが発見されました」

「何？」

1人がテープを流した。

『君ら警察が我々の前ではどれほど無力か思い知らせてやろう』
無愛想な老人の声が聞こえた。

私はテープを叩きつけたかった。

『君達の仕事は街の治安を守ることだろう？我々の仕事は街を破壊することだ。ここで1勝負しよう。ゲームをするんだ。』

言っておくが、我々は既に人間ではない。文字通りな』
望むところだ。相手が怪物なら容赦する必要ない。

我々は手を出してはいけない怪物から挑戦状を受けた。

貴様らの思い通りにはさせない。

怪物達め、今度こそ始末してやる。

私は拳銃を握り締め、車に戻った。

プロローグ（後書き）

どうも、作者です。今まで小説提供者だった僕が初めて小説を投稿します。

どうか暖かい目で朗読お願いします。

ユーザー登録なしでも感想を受け付けています。

3週間の1回は更新するペースで行きたいと思っています。

どうか感想などをお願いします。

夢遊病（前書き）

【主要登場人物】

レベッカ・サンダース

18歳で優秀な成績を収め大学を卒業した才女。

ジェフ・セイント

22歳の男性。レベッカとは親友以上恋人未満の関係。

ジャック・スミス

連邦捜査局（FBI）特別捜査官。レベッカの才能を見込む。

ジョン・ドウ

異常殺人鬼。

ウィル・ラウンズ

優秀弁護士。

アマンダ

サイコパス
精神病質者。

バリー・マクレーン

ガンマニアの刑事。

フランシス・サンダース

レベッカの祖父。

ポール・オルコット

特別機動隊（SWAT）隊長。

サニー

レベッカの義理の妹。8歳。

ウィル・レノン

刑事

夢遊病

真夜中だった。

レベツカは眠気を吹き飛ばすために熱いコーヒーを喉に流し込む。
そろそろかな？

レベツカは扉を開けた。

8歳の少女なら望むものがそろった子供部屋の入った。
可愛いもの

義理の妹のサニーには望むものは何でも与えた。甘やかしすぎかもしれない。けれど、私はサニーの笑顔が素敵でたまらない。義理の妹として引き取ったときには生涯かけて育てようと決心したものだ。

部屋の中央にサニーが立っていた。

艶々と輝く彼女の金髪が、無造作に垂れ下がっている。ぱつと目を開く。彼女の青い目がレベツカを睨む。

「逃げなきゃ」

サニーは言った。

「逃げなきゃ」

レベツカは近寄る。

「安心して、何も居ないわよ」

サニーの肩を掴む。

「ブギーマンもフレディもジェイソンも居ないのよ」

サニーは怯えていた。

「違う……逃げなきゃ」

「誰も居ないの、この家は安全よ」

「逃げなきゃ」

「何から？」

「満月の夜は危ない」

「狼男は存在しないの、安心して」

サニーは首を振った。

「彼らから隠れなきゃ」

彼ら？誰のことかしら？

一瞬背後に気配を感じた。

振り返ったが、誰も居ない。

今の気配は？

サニーがぐたりと倒れる。

レベッカは慌てて抱き上げる。

ぐっすりと眠っていた。その寝顔は可愛らしかった。

レベッカはベッドに寝かせ、毛布を掛けてあげた。

「レベッカ、入院させるんだ」

ジェフはソファに疲れ果てて座るレベッカに優しく言った。

「君は一晩中、彼女サニーの世話を焼いている。そのせいでこの最近ろくに睡眠を取ってないじゃないか。仮眠すら取れていない」

レベッカはジェフに答えた。

「私は大丈夫。母親はもっと大変よ？」

彼女の声は愛想の良い好印象を与える。

「君はまだ若い。毎晩寝ていないと、体に悪影響が出るぞ」

「望むところよ」

ジェフは首を振った。

「君が参ってしまったてはサニーが悲しむ。いいか、サニーを入院させるんだ。君は休養を取る」

彼はレベッカの肩を掴んだ。

「いいか？思い切って入院させるんだ。じゃないと君は駄目になってしまう」

「私は大丈夫だから」

「それは強がりだ。彼女の夢遊病は僕達の手には負えない」

悪夢はある日から起きた。それまで普通の可愛らしいサニーがある日突然悪夢にうなされたように何かから逃げたがっている。

ジェフは言った。レム睡眠やノンレム睡眠などの専門用語を使っ

て説明し始めた。

彼女はきつと友人の家などで怖い映画を見たんだ。そうだな、『エルム街の悪夢』や『13日の金曜日』や『ハロウィン』辺りかな？それとも『リング』か『呪怨』かもしれない。さもなければ、酷いニュースを見たんだろ？丁度その日に一家虐殺事件のニュースが一日中放送されてたんだろ？彼女はストレスでなんちゃらこんちゃらっ……と言った。

専門病院にも連れて行っった。

医者の診断は最低だった。

原因はストレスですね。

もしかしたら心的外傷後ストレス障害の可能性は否定できません。暴行や酷い事故等はありませんですか？そういう経験は？

ないとレベツカは答える。

医者は他にも質問した。

今朝の食事は？

あなたとの関係は上手くいってますか？

虐待の可能性は？

学校でのいじめは？

教師からの嫌がらせは？

レベツカは怒りを覚えつつ堪えながら答えた。

ありません。

ありません。

ありません。

ありません。

ありません。

サニーに虐待？学校でいじめ？

サニーに虐待？学校でいじめ？教師からの嫌がらせ？

サニーに虐待はしていないし、学校では親友が多いし、教師からはほめられている。

ストレスが原因？

一体何でストレスが溜まっているの？

医者には当てに出来ない。

他のマシな医者のも診断させ通わせたが、改善は無かった。

私もニュースを見せず、映画を見せずと言う規制で興奮を感じさせなかった。

事態は悪化する一方だ。

医者は役に立たない。

ジャフはパンフレットを見せた。

「大丈夫だよ。サニーが何かされると思ってる？拘束具は付けられないし、変なマスクは付けられない。リゾートだよ」

レベツカはため息ついた。

「彼女が精神病とは思えない」

「僕もだよ、けど現に夢遊病になってる」

それは否定できない。

「私……医者のは任せられない」

「医者に任せるんだ。悪ければ飛び降りるかもしれない」

「医者に任せていいの？」

「任せるしかない」

レベツカはサニーとの思い出を振り返った。

「任せていいの？」

「とにかく電話してみるよ。僕に任せて」

ジェフは優しい面倒見の良い男だし、話の分かる男だ。けど、今回の判断は冷酷に思えた。

これもサニーのため！

レベツカは自分に言い聞かせた。

その時、突然視界がぼやけた。

同時に意識が………

コインの裏表

精神異常犯罪者を収容している州立フレデリック病院の医長ウィリー・ヤングがバリー・マクレーンを出迎え、握手した。

「こんにちはマクレーン刑事」

「こんにちはヤング博士、お世話になります」

「いえいえ、お安い御用で。あなたとジョンの会話で彼の正体が多少は摘めるかもしれない」

「私は出来るだけジョンと一対一で話し合いたい」
ウィリーは頷いた。

「言っておきますが、彼は彼の部屋に入れたままにしておく。あなたのご希望通り拘束服なしでの面会はある所でしかできません」

バリーは頷いて案内してもらった。

「少しジョンについて話していただけませんか？」

「話すことは何も無いよ」

「いいですか？この世で彼を理解しているのはあなただけ。彼について話していただけませんか？そうすれば彼の正体が少しは掴める」

「何も無いね」

「医局員の大多数はこう思ってるんです。あなたが彼の犯行、いえ【手口】ですかな——ひょっとするとあなたは彼の幻想を再生できるのではと？だから——」

「言っておきますが彼のことは何も話せない。本名不明で名無しの死体に付けられる【ジョン・ドウ】を自ら名乗り、指紋も登録なし、親族経歴一切不明。正体不明の殺人鬼だ。俺の証言で彼の正体が分かるなんて、それこそ幻想だ」

最嚴重監視棟の鋼鉄のドアが閉まる。

今日は雨の日だ。

彼は雨の日は午前中寝ている。

鋼鉄の格子が個室の端から端まではまっている。

その鉄格子の向こうで手を伸ばしても届かないところに天井から床へ、壁から壁まで丈夫な網が張っている。

そうした防護柵の間から、床にボルトで固定されているテーブルが見える。

バリーは歩み寄った。

ジョン・ドウは壁にもたせかけた枕に頭を乗せ、ベッドで寝ていた。

腹部の上に『ローマは一日にして成らず』という本が乗っていた。バリーが声を掛けようとした。

ジョンは目を覚ました。

「相変わらず遅い体と渋い髭だな、バリー」

「これがダンディーたる姿よ」

「ダンディーか、面白い」

ジョンは余裕を見せる妖艶な笑みを見せた。

ジョンは長身で遅い体をしていた。

年齢は30代前半ほどか。

オールバックの髪の毛を掻きながら、鋭い赤い眼差しをバリーに向ける。

なぜジョンの虹彩が赤いのかは医学会も不明だ。

「私のクリスマスプレゼントとカードは受け取ったかな？」

「ああ、ありがたい」

ジョンのプレゼント——心理学系の本は受け取ったが——不気味なカードは狂気感染を恐れたバリーが裏庭で焼き捨て、手を洗った。

「家族は元気かね？」

「ああ、妻も娘も息子も元気にしてる」

ジョンは再び笑みを見せた。

「何がおかしい？」

「いや、ちょっと思い出したただけだ」

「何を？」

「気にするな。君が来てくれて嬉しいよ。ここを尋ねるのは平々凡々な精神医学者やら田舎から来た三流精神学者や私をモデルに小説を書こうとしている新人三流小説家ばかりで退屈だ」

「それは大変だな」

「退屈で大変だ」

「お前の論文読んだよ。素人でも面白く感じる」

「素人？君が？私を逮捕した君が？」

「まぐれだよ」

「私の犯罪は完全だった。それを君は打ち破った。完全犯罪を不完全にした」

「偶然だ」

「それで、私に何の用だ？」

「今回の猟奇殺人事件の助言が欲しい」

「私の助言？私を打ち破った君に何を助言すればいい？」

「新聞は？」

「取ってない」

バリーは深く息を吸うと説明を始めた。

「今回の猟奇殺人の被害者は父親母親息子娘の4人家族。父親は寝室で惨殺。母親はバスルームで鎖で絞殺。ここまでは普通の事件と変わりない。だが、息子は台所で内臓を抜かれた。恐らく生きたまま。娘は食卓のテーブルで鎖で縛られながら焼殺だ。こちらとも恐らく生きたまま」

「犯人は芸術家か何か？」

「不明だ。犯人と思われる血液型指紋は無かった」

「ファイルはあるか？」

「ああ」

「渡してくれないか？」

「駄目だ」

「機密事項か」

「一般には公開できない」

「なら助言は出来ない」

「本を買ってやる。好きだろ？」

「本は沢山ある」

バリーは考え込んだ。

「いいだろう、渡そう。助言はちゃんとくれよ？」

「約束しよう」

バリーはスライド式のトレイに入れ、ジョンが引っ張る。

ジョンはファイルを読み始めた。

どれだけの時間が過ぎたか？

1時間半は過ぎた。

「ふむ……この犯人は自身の容姿が嫌いらしい」

「どういう意味だ？」

「家中の鏡が割れたと書いてあるな？凶器に使うなら1つだけで十分……が、全部割れている」

「被害者と争ったかもよ？」

「全員死因以外の外傷はないのだよ」

「じゃあ、犯人は豚男か？」

「男とは限らん」

「女だと？」

「その可能性は否定できない。女性は男性より自身の容姿を酷く気にする」

「……」

「今度の土曜日にまた来てくれ。私の意見を話そう」

「今は無理か？」

「勉強せねば」

「勉強？一体何を？」

「また土曜日」

ファイルが戻ってきた。

「お大事に」

バリーはそう言って部屋を出た。

ジョンはベッドに寝転んだ。

「バリー、君に言い忘れたことがあるな。君と私は似て非の存在だ。いわばコインの裏表だ」

バリーは外に停車しているパトカーに乗った。

運転席には自分の後輩——ウィル・レノンがコーヒーを飲みながら待っていた。

「誰と面会したのですか？先輩」

「旧友、いや因縁の敵かな？」

「つまりジョン・ドウですか？」

「そうだ」

「彼は人気者ですよ」

バリーは不満げに頷いた。

確かにジョンは殺人鬼だが殺害方法のおかげか、カルト的人気を誇る。

彼が書いた不気味な絵は高額で落札されたか、美術展に展示された。

彼は生きながらえながら伝説の殺人鬼だ。

バリーはジョンを支持する国民の心理が理解できない。

「発車しろ」

「了解」

車が発車する。

殺人

どこにでも居るような4人家族の父はベッドに入り込んだ。
誰かがノックした。

「シャワーするわ」

妻がそう言ってバスルームに向かった。

「ああ、楽しみはその後だな」

父は新聞を読み始めた。

中々興味のある記事が見つからない。

眠気が襲ってきた。

父は一眠りしようと目を瞑った。

だが、何者の気配を感じた。

「シャワー終わったのか？」

寝室のドアを見た。

そこに居たのは妻ではなかった。

見知らぬ女性だ。

「誰だ！お前！」

父は怒鳴った。

女性はゆっくりと近寄った。

服装はどこかのメイドのようだ。

容姿は思わず見とれてしまうくらい美しかった。

まるで人形のような美しさだ。肌も白い。目も青い。

だが人間らしい生気が感じられない。

紫と青の様な髪の毛をした女性は口を開いた。

「私はダリアでございます」

イギリス訛りの英語でダリアは答えた。

父はベッドから下り、警戒しながらダリアに問う。

「何のようだ？一体何しに来た？」

「ご主人様の命令でご訪問に参りました」

「訪問？勝手に人の家に入りやがって」

「インターホンを鳴らしましたが、あなた達が出ませんので強行しただけでございます」

インターホンを鳴らした？

父は頭がおかしくなりそうだ。

「ご主人は誰だ？」

「それは答えられません」

「だれだ！」

「答えられません」

「答えろ！」

ダリアはゆっくりと近寄った。

父はなぜか危機感を覚えた。

この女はやばい！きつと危険だ！

ベッドの横にある引き出しから回転式拳銃を取り出した。

「来るな！あっちへ行け！」

それでもダリアは近寄る。

正気か！？

「来るな！」

ダリアは銃口を掴んだ。

と思うと、銃口を自分の左掌に向けた。

そして、右手の親指で引鉄に掛ける。

そしてダリア自身が引鉄を引く。

銃口が火を噴き、弾丸が掌を貫いた。

それでもダリアは無表情だ。

「今夜は綺麗な満月ですよ」

「何？」

ダリアは近くにある鏡を見た。

そして左手で割る。

適当な大きさの破片を拾い上げる。

「ご主人様の命令です。怨まないで下さいませ」

「どうい——」

ダリアは破片で父の喉を切り裂いた。

血が噴水のように吹き出る。

血は止まらない。

ダリアは破片を持ち歩きながらバスルームに向かった。

妻はシャワーを浴びていた。

暖かいシャワーが一日の疲れを癒してくれる気がした。

銃声が鳴り響いた。

また拳銃の練習？

そう思いながらもシャワーを浴び続ける。

だが、バスルームの扉が開く。

振り返ると、ダリアが居た。

「あ、あなた誰？」

「私の名前はダリアでございます」

「何のようで？」

「ご主人様の命令です。お許しを」

そう言って突然鎖で首を絞めてきた。

目が飛び出しそうになった。

苦しい。

痛い。

ダリアの力は凄まじかった。

気が遠退く。

意識が薄れていく。

もう彼女は意識を失った。

それでもダリアは絞め続けた。

完全に動かなくなる。

ダリアは鎖を放した。

バスルームの鏡を割った。

洗面所の鏡を割った。

ダリアは台所の包丁を持って2階の子供部屋に向かう。

7歳と6歳の娘と息子が静かに眠っていた。

ダリアは2人の頭を撫でた。

「めでたし、聖寵みちみてるマリア、主、御身とともにまします。

御身は女のうちに祝され、御胎内の御子イエズスも祝されられたもう。天主の御母、聖マリア、罪人なるわれらのために、いまでも臨終のときを祈りたまえ、アーメン」

ダリアは優しい声で祈禱し、終えた。

まずは娘のほうを抱きかかえ、台所のテーブルに載せ、ガムテープで縛り上げた。

息子のほうは口にガムテープを張った。

さすがに息子は目を覚ました。

ダリアは問答無用で包丁で腹を切った。

息子は叫んだ。

ダリアは腹を切り開き、まずは腸を取り出し始めた。

息子は叫び続ける。

次に胃を切り出した。

黙々と内臓を抜き出した。

息子はもう叫んでいない。

ダリアは内臓を全てリュックサックに入れ、台所に向かった。

娘も目を覚ましていた。

ダリア近寄った。

「あなたのために祈りましょう」

首に掛けてある十字架を握った。

「天におられるわたしたちの父よ、

み名が聖とされますように。

み国が来ますように。

みこころが天に行われるとおりに行われますように。

わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。

わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆるしま

す。

わたしたちを誘惑におちいらせず、
悪からお救いください。

国と力と栄光は、永遠にあなたのものです。

アーメン」

優しい声で祈りを終えた。

ダリアは流れ出る左の血でテーブルの下になにやら魔方陣の様な
紋章を書いた。

テーブルを囲むようにロウソクを置いた。

娘は自分が置かれている状況を分かっていない。

「安心してください。火は罪を浄化します」

そう言って床に灯油を撒き散らす。

「今夜は綺麗な満月ですね」

灯油に火をつけた。

台所はたちまち燃え出した。

ダリアは家を出た。

火が娘の服に燃え移る。

娘は必死に助けを求めようと叫んだ。

煙が部屋に充満する。

皮膚が焼けだした。

ただ娘は叫び続ける。

全身が燃え出した。

苦痛が襲う。

凄まじい熱さが襲う。

息苦しさが襲う。

自身が焼ける匂いが鼻に届く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6735y/>

キラークハウス

2011年12月3日17時55分発行